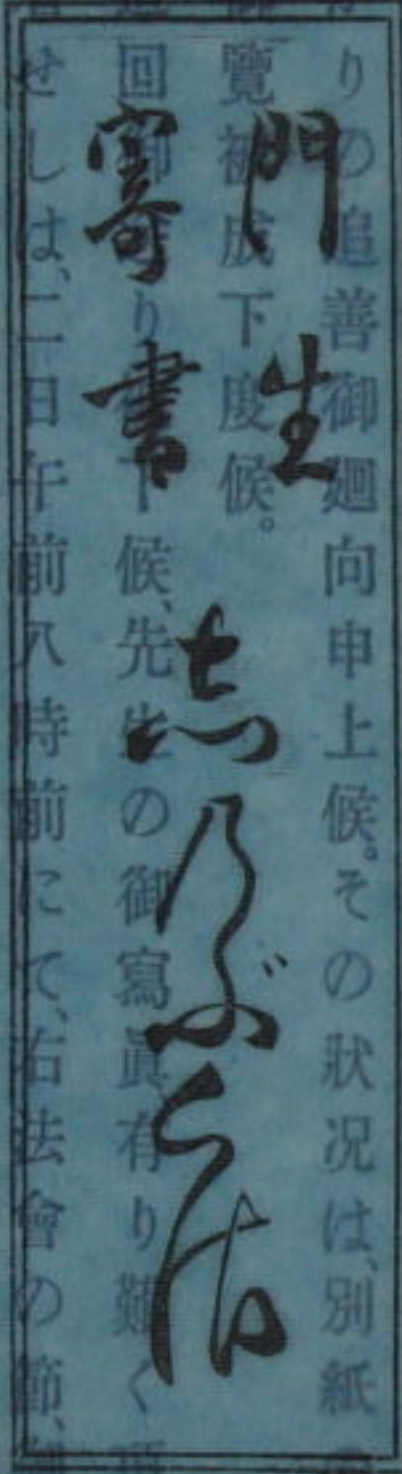


ましに重らせ給ふさはいへ日頃御健やかなる御身なれば、程なく御全快に至らせ給ふべしと頼みなき頼みをかけつゝ、只管一日もはやくいえさせ給へかしと祈りし甲斐もなう、遂に五月廿六日を以て、永き眠につかせ給ひぬるぞ悲しき。あゝ懐しの師の君よ、と慕ふ教へ子を残りおきて、死出の旅路にいてたゞせ給ひしぞ悼まじき。あゝ天は無情。かく無情なる天は、我等に憂き目を見せんとてか、はた天つ神は、師の君の御才徳を愛づる餘りに御傍近く召し寄せ給ひにしかげに御教へを受けし日は浅けれど、御高恩のほどを思へば、雲にそびゆる富士の峯よりも高く、そこひも知らぬ大平洋よりも深し。されば益々斯道の發達を計り、此校の名を擧げんことこそ、今後我等が御恩の萬一に報い奉るべき業ならめ。徒らになげきのみあるべきかは、と強ひて心を勵ませども、なほ追慕の涙に袖のひる間もなきを、外面の方にては雨いよゝはげしく降り來りぬ。

寫眞の禮狀

私立丸龜和洋裁縫女學校長 鹽津つね子

拜呈、此頃は早速御玉章賜はり、誠に有り難く御禮申上候。私事豫て申上候通り、去る本月二日は、御葬式の日と承り候故、本校にて、ただ意ばかりの追善御廻向申上候。その狀況は、別紙の新聞に記載有之候間、御覽御成下度候。さて、這回寄下候、先生の御寫眞有り難く頂戴致候。この御寫眞到着せしは、二日午前八時前にて、右法會の節、御寺様方に御讀



經に御掛りなさらんとせし時にて、思ひ掛けなき何よりの御品、殊に最近の御撮影にて、私は生前の先生に御目に掛りし心地致候。餘りの嬉しさに、つらく、拜見致居候内、海岳の高恩を受けし先生は、最早此世におはさずや、唯一言なりと御言葉承りたし杯と、愚痴を

ましに重らせ給ふさはいへ日頃御健やかなる御身なれば程なく御全快に至らせ給ふべしと頼みなき頼みをかけつゝ、只管一日もはやくいえさせ給へかしと祈りし甲斐もなう、遂に五月廿六日を以て、永き眠につかせ給ひぬるぞ悲しき。あゝ懐しの師の君よ、と慕ふ教へ子を殘しおきて、死出の旅路にいてたゞせ給ひしぞ悼まじき。あゝ天は無情が、無情なる天は我等に憂き目を見せんとてか、はた天つ神は、師の君の御水徳を愛づる餘りに御傍近く召し寄せ給ひし。か。が。に。御。教。へ。を。受。け。し。日。は。淺。け。れ。ど、御高恩のほどを思へば、雲にそびゆる富士の峯よりも高く、そこひも知らぬ大平洋よりも深し。されば益々斯道の發達を計り、此校の名を擧げんことこそ、今後我等が御恩の萬一に報い奉るべき業ならぬ。徒らになげきてのみあるべきかは、と強ひて心を勵ませども、なほ追慕の涙に袖のひる間もなきを、外面の方にては雨いよゝはげしく降り來りぬ。

寫眞の禮狀

私立丸龜和洋裁縫女學校長 鹽津つね子

拜呈、此頃は早速御玉章賜はり、誠に有り難く御禮申上候。私事、豫て申上候通り、去る本月二日は、御葬式の日と承り候故、本校にて、ただ意ばかりの追善御廻向申上候。その狀況は、別紙の新聞に記載有之候間、御覽被成下度候。

さて、這回御送り被下候、先生の御寫眞、有り難く頂戴致候。この御寫眞到着せしは、二日午前八時前にて、右法會の節、御寺様方、將に御讀經に御掛りなさらんとせし時にて、思ひ掛けなき何よりの御品、殊に最近の御撮影にて、私は生前の先生に御目に掛りし心地致候。餘りの嬉しさに、つらく、拜見致居候内、海岳の高恩を受けし先生は、最早此世におはさずや、唯一言なりと御言葉承りたし杯と、愚痴を

こぼし候。

御寫眞を御送り被下候御厚情は、何んと御禮を申上候て宜しきや、實に御禮の言葉も無之候。右は君様の御親切と共に、永く保存致すべく候。先は御禮旁御通知申上候。乍憚皆々様へ宜しく傳言なし下され度候。あら〜かしこ。

六月六日

つね子

渡邊 滋様

御坐下

昔がたり

(書面の一節)

長野高等女學校教員 鳴海 玉子

(前略)其後學校を出まして、思ひがけなくも信濃の山路へ分け入りました。只今は長野市の高等女學校に、恩帥のめぐみの跡をふみつ

つ、教へ子を導いて居ります。この處、遠くは淺間の山の眺望、近くは裾花川の清き流も、又捨てがたき思ひがあります。さりとても、片時も忘れぬは、都の春秋で御座います。指折りて見ますれば、早や二とせ以前の初秋で御座いました。學び庭の姉妹たちと、楽しく八街へ葺狩に参りました時、亡き師の君の笑まはしきアノ御顔は、今なほ目に見ゆる様で御座いまして、一生忘れは致しません。アノ時、一戸さんと妾と二人で、松の木蔭に腰をかけ乍ら、こし折れにてもと、首をひねつて居りました處へ、先生が御通りになりました。て、是非に詠草を御見せ、との仰せて、妾共如何に因りましたでせう。あゝ〜、アノ時の様な楽しい時節は、又いつの世にか來ませうぞ。朝な夕なに數へも得られね御惠みを頂きました師の君には、遠く遠く旅立たせ給ひて、當時の事は皆まことに昔語りと成つてしまひました。何たる悲しい事で御座いませう。妾は一戸さんと共に、恩

師の君には、唯に裁ち縫ひの道しるべのみでなく、如何程精神上の慰安を受けた事が御座いましたか知れませんが、實に精神的、物質的に受けました御高恩の數々は、いつの世にか忘れませう。たゞく是からは、出來得ぬながらも勉め勵みまして、みめぐみの万分の一にても報いまつらんと、心掛けて居るので御座います。

この度、故恩師の君の追悼録を御編纂に成りますさうで、わざわざ御通知を頂きました處、素より修養なき身の、まして昨今は病氣のために拙なき筆も運びかね、やう／＼の思ひで二三首詠みましたから、御目にかけますが、何卒十分に御なほし下さいまして、御靈前へ御供へ下さいまする様、くれぐれも御願ひ申上げます。かしこ。

七月二十八日

た ま 子

小 森 松 風 先生

み前に

忘れかねて

神奈川縣葉山小學校教員 山 本 民 子

人皆ねしづまりたる後、思ひにふける我心、ものうきあまり文机に向へど、筆もえ取らず、獨り思ひにふけるなり。あゝ我心、何地に行きしか。

昨日の淵は今日の瀬と、誰が云ひ初めし言の葉ぞ、げに人の命ほどはかなく、つたなき物はよもあらじ。あゝ思へば、なつかしき師の君よ、去る皐月の末つ方ぞ、多くの教子をあとに残して、よみ路のまらうどとはなり給ひぬ。

あゝ思へば、げにはかなきは命なるかな、去年までは、實父とも頼みみ教を受けてしものを、月に村雲、花に嵐、ちりてはかなき世の習ひとはなりはて給ひぬ。あはれ師の君、今は何地に居ますらむ、獨り死

出の山路をたどらせ給ふにや、三途の川をも、獨りして渡らせ給ふにやなど、くさくさ、思ひめぐらせば、萬感そゞる胸にみち、遂にまどろむともなしに、夜はあけにけり。折しもひゞく山寺の鐘は曉を報するに、一しほ無情を覺えてなむ。

なく涙雨となりては渡川

水のまさりてなやめるものを

師の御後を慕ふ

高知縣中村町高等小學校 松岡香枝子

浅からぬ師弟のちかひ結びしは、あはれ早やも四年の昔、頃はやよひの半ば過ぎ、葉櫻の蔭みどりゆかしき裁ち縫ひの窓に、師の君のほまれ高きを慕ひつゝ、故郷の父母に送られて、山里を後に都の空さしてはせのぼり、初めて東京裁縫女學校の門をくゞり、父にもま

してやさしき御聲を耳にしたる時のうれしさよ。故郷遠く離れし身にも、あたゝかき師のめぐみに、つゆ心細き思ひもなく、日々いそしむ針の道、まなびそめしは、あしたゆふべと思ひきや、忘れがたきは去年のきさらぎ初めつ方、卒業證書をにぎる身の上となり、故郷へかざる錦の袂、家には父母や待ちまさん、さりながら永き月日、我が子の如くめで給ひし師の君と別るゝことの悲しさよと、萬感こもつゝ胸にせまり、なつかしき師の君と、御名残りの寫眞など撮影して、いよく、明日は、都を去る身の今更に残り惜しく、師の君を教員室に尋ねまゐらせ、永の間の御禮や、將た御いとまごひなど申上げしに、先生にもいとゞ名残を惜しませ給ひ、卒業の後は何卒立身出世なしくれよ、と残る方なき慈愛の御言葉に、あつき涙のとゞめ難く、又逢ふ事もあるべしと、頼み心もあだとなり、そのまゝ永久の御わかれとは、神ならぬ身の知るよしもなく、あはれ今にして思へ

ば、彼の時こそ恩師の御姿の見をさめなりしかと、今更の如く人生のはかなきを悟りぬ。さりとても、あまりに無情の世やと、涙わき出て、とどめあへず、あはれ此御姿は、再び逢ふこと叶はぬ形見の御寫眞よと、生けるが如き御顔に對して、み名を呼べども答へ給はず、おのづと下るわがつむり、あはれ、今日多くの生徒より、先生々々と打呼ばれ、裁ち縫ふわざを教ふるも、皆これ恩師の賜ぞと、骨身にしみて有り難し。學校へのゆきかへり、師の鴻恩を思ひ出で、は返らぬ昔なつかしく、不幸にも都遠きひなにある身は、師の御墓にさへ參る事叶はず、こたびの新任校長滋先生より、裁縫雜誌を賜り、御野邊送りの御有様を拜讀せし時は、今更に在りし昔の忍ばれて、悲しさ云はん方なし。日頃絶えて久しき學校を尋ねしに、昔にまして校運は盛なるも、師の君はいまさず、何となくしめりがちなる心地して、懷舊の情に堪へず、もれ出ずる涙を、ハンカチにつゝみなが

ら、御いとま申して立ち出でぬ。その折のかなしさ、思ひあまりて中々に筆に寫し得ず、ただ、昔を忍ぶ師の君の、御水莖のあと堪へ難くてなん。折から細り行くともし火に、再び筆を執る勇氣もなし。あゝ、悲しき哉。

思出の衣

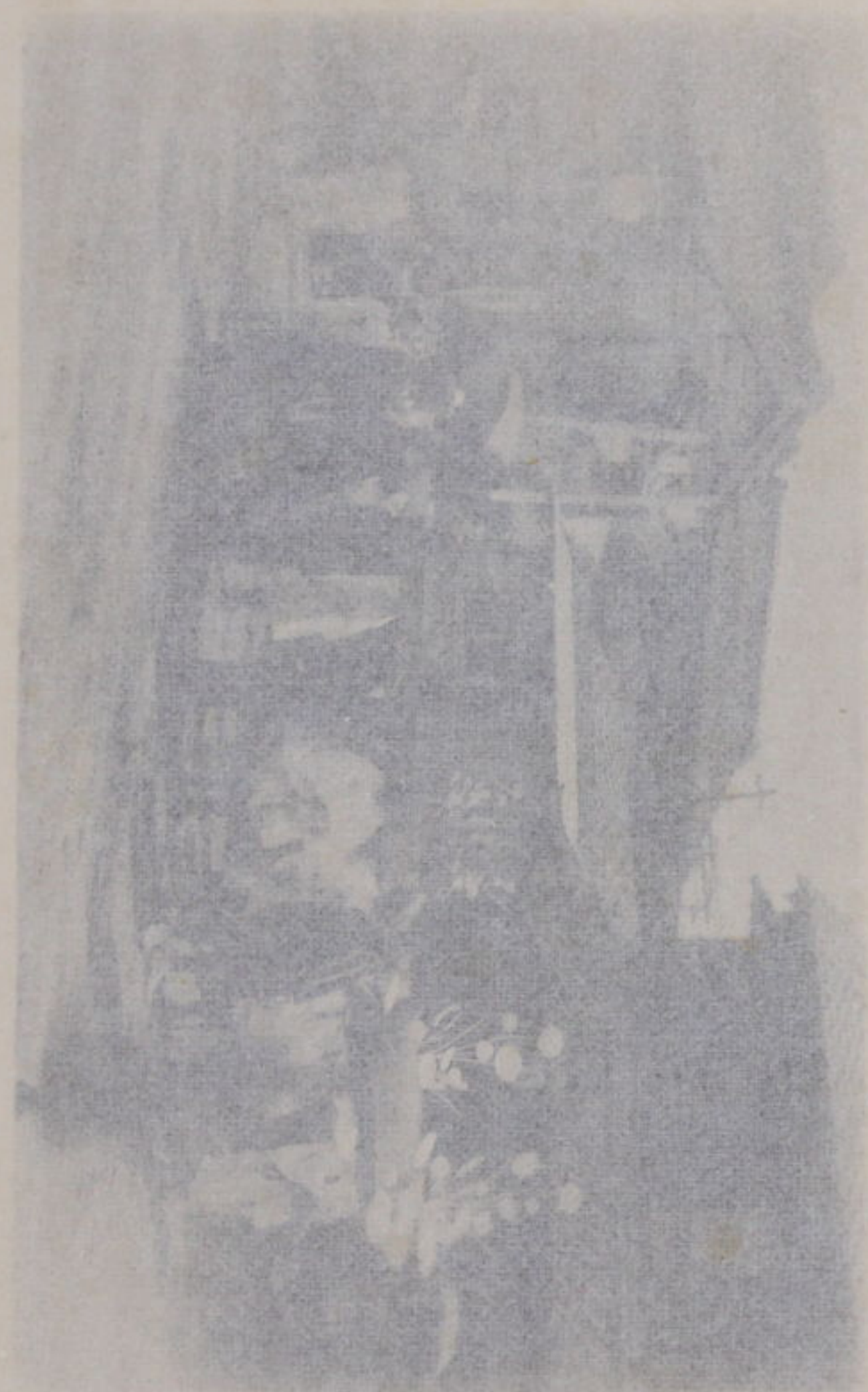
前山梨高等女學校教員 一戸伊勢子

花の都にありながら、日頃は務に忙しくて、上野、向島の花も、よそに打過せるを、今朝しもなつかしの友にそゝのかされて家をいでんと、晴の着更を取り出せしに、忽ち妾が胸は、いたくも曇り來て、涙の露の落つるをさへ、氣付かざりき。されば、かたへの友いぶかりて、如何にと問はるゝも、とみにいらへんやうもなし。思ひ出つれば、あはれ三とせの昔なりしよ。この衣を學びの窓にて

縫へる折には、師の君、何くれと導き給ひて、その出来上りを見たまひては、いとく、御満足におぼされ、よくも出来たりなとて、いたくも賞めたまひし其の御顔、その御まなざし、今なほ忘れず、此の衣を見るにつけても、御慕はしさやるかたなきをいかにせん。あはれこは其の時、親しく御手にふれし衣、今なほ昔のまゝなれど、なつかしの師の君は、とこしなへに逝きて歸り給はず、いかになげきても、くやみても、及ばぬ事ながら、いよく、そのかみの忍ばれて、やる方なみだに打ちむせぶのみ。

かくて、時いたくうつれるに驚き、いそぎ花見にもものし、かへさにはその一枝を手向の水と共に、師のみ墓にさゝげまつらばやとて玉子の君と打つれて出て立ちぬ。

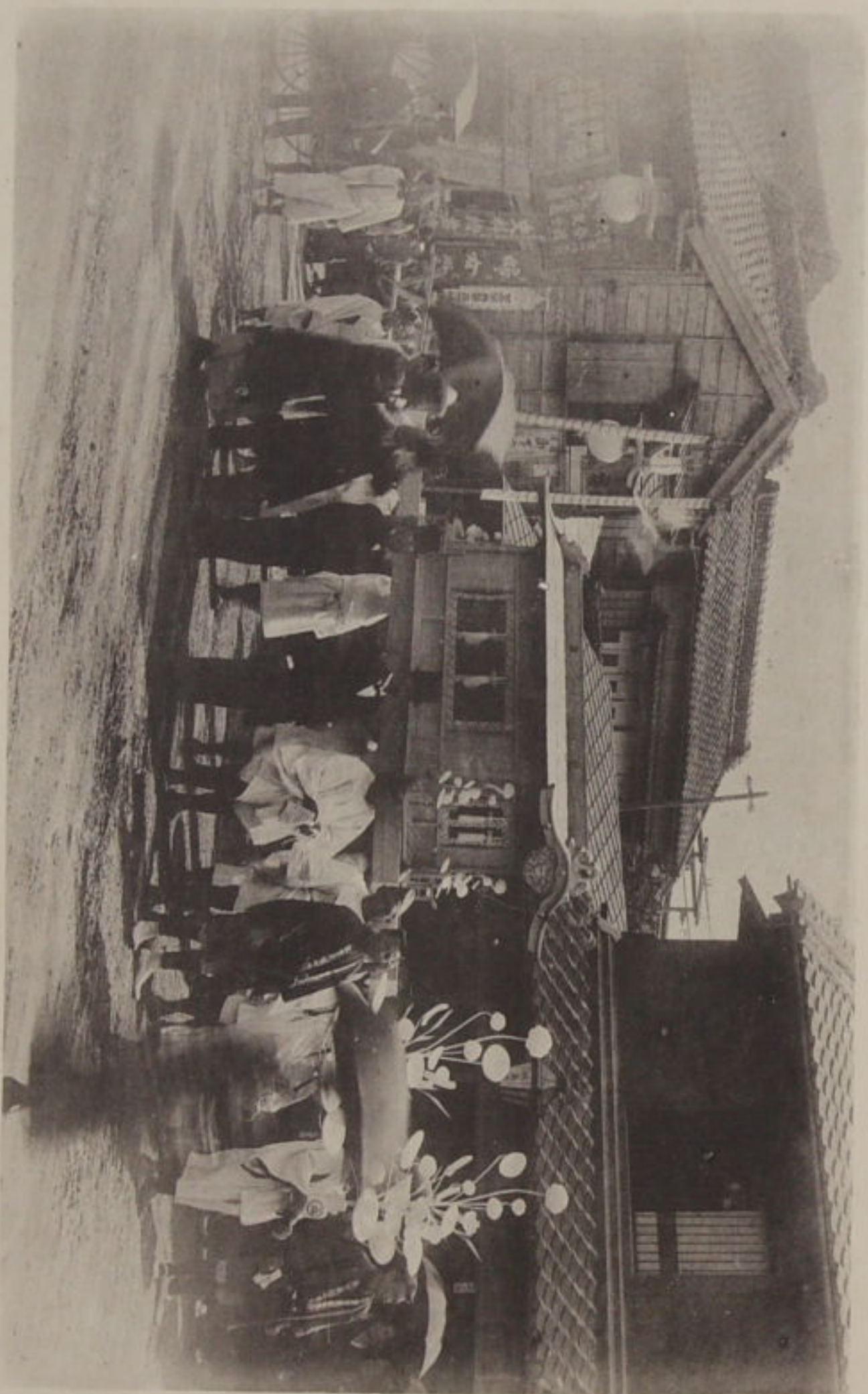
木の下に君し偲へば形見なる、衣の袖に櫻ちるなり
散る花に亡き師の君を思出の、衣の袖をしほる頃かな



縫へる折には、師の君何くれと導き給ひて、その出来上りを見たま
 ひてはいともく、御満足におぼされ、よくも出来たりなとて、いた
 くも賞めたまひし其の御願、その御まなざし、今なほ忘れず、此の
 衣を見るにつけても、御慕はしさやるかたなきをいかにせん、あは
 れこは其の時、親しく御手にふれし衣、今なほ昔のまゝなれど、なつ
 かしの師の君は、とこしなへに逝きて歸り給はず、いかになげきて
 もくやみても、及ばぬ事ながら、いよく、そのかみの忍ばれて、やる
 方をみだに打ちむせぶのみ、

かくて、時いたくうつれるに驚き、いそぎ花見にもものし、かへさには
 その一枝を手向の水と共に、師のみ墓にさゝげまつらばやとて、玉
 子の君と打つれて出て立ちぬ、

木の下に君し徳へば影見なる、衣の袖に纏もるまき
 散る花に亡き師の君を思出の衣の袖をし理る暇かな



恩師の倂

○

伊藤とく子

五月雨しとくくと、のき端をたゞく、いにしさつきのその日に、親しき恩師を失ひて、例へば雉子の焼野に迷ふが如くにて、一人ならず百々千々の人の、師の御倂慕ひ参らせぬ者やはある。妾もその中の一人として、今日しも雨の晴間を見て、日頃師の君のいとめて給ひにし八重櫻の、今はただ葉のみ青々と繁りあへる下に、露の一しづくをかりて、御倂の一端だに書かむとすなり。嗚呼師の君は、近世の大教育者、大成功者なりきとは云はずもかな。教へ子を深切に導き給ひし事は、眞に母の如く、悪しき所を誡め給ひし事は、實に父の如くなりき。此春、妾いたづきにて、寄宿舎の二階に淋しくいねたる折、師の君は親しく見舞はせられて、御手づから驗温器にて熱を計り、

いとねもごろに慰め給ひぬ。實にその御情に泣かてやはあるべき。されば遠近より慕ひ集ふ人、數つきせぬも理なり。嗚呼、書けども硯の水のつきぬを如何にせむ。折柄の風にはらくと肩にふりかゝりし露こそ、おゝなれも、師の君を慕ひ參らする涙なれと、一枝を手折りておくつきにさゝげ奉りぬ。

○

井上楫子

兼てより誠實勤勉を以つて、成功せられしと聞きつれば、尊敬の念、おさへ難うして、漸く去る四月その慕はしき校に入るを得たり。されば入學以來、未だ日淺く、隨ひて師の君の教授を受けしも、僅かに片手の指の數のみにて、敬慕せし師の君には、病の褥にぞ就き給ひき。されど、程なう快方にならせられ、親しき御教を受くべしと期しつゝ、只管全快の日を祈り待ち居しが、あゝ人世は朝に置く露の如く實に悲しい哉。待ちわびし甲斐もなく、慕はしの師の君には、

遠きく、彩雲の樂土へぞ趣かせ給ひける。されど今尙夢の様にて、親しく御言の葉を聞き、御姿を拜せし昔偲ばれて、何所よりかなつかしき御聲の聞ゆる心地するぞ悲しき。師の君は幼なりお在する頃より、なみくならぬ辛慘を嘗められて、今の成功を見給ひしと聞くからに、何人にも上下の隔てなう、いとも懇ろに優しうおはし、公の御事にも財寶を惜しませ給はず。哀れの者にも惠ませ給ひ、すべて慈善の事に御心をそゝがせ給へれば、皆敬ひ慕ひ聞き傳へて、我もくと此の門に入るを喜び競ひたりけり。惜しいかな、あゝ悲しいかな。

○

水田豊子

あゝ、人生は朝露の如しと、昔の人の云ひけむもうべなるかな。吾等が悲しき記憶に残る去月の末つ方、七日にわたる休日は、實に我等、謹慎悲哀の日なりき。五月雨の晴間なき日の夕つ方のことな

りき、文机に身をもたせ、種々思ひ出ること多かり。日は定かにはおぼえねど、恩師の君の逝かせ給ふ二十日餘り前の事なりき。第二教室にて理論を説かせ給ひし時、『過日塵くづ買の翁來りしに、其様子いと哀れに又おとろへたりければ、其よわひを問ひしに、今年六十二歳と答へぬ。然るに見る處、三四歳もませたりければ、いと氣の毒に感じ、種々食物の注意等述べ聞せたり』とのたまひぬ。以ていかに慈善の御心深かりしかは、其御言葉の中に知らるゝなり。又師の君『考ふるに吾より二歳年少なくて、見る處の衰へたれば、彼此比較して吾身體のすこやかなること、いと心つよし』など、述べ給ひし笑ましき佛の、今なほ眼前に見ゆるなり。

かゝる事思ひ浮べつゝ、電氣のつくをだに知らず、只夢現となりぬ。折から造花の、ばら、菊、其の他美々しき物を身に負ひて實にも笑ましきかんばせに、あなやと計り打おどろきしが、折から曉鐘の響き

に夢は破れぬ。御面影は何處に、さては前恩師の君の御居間に通夜せし時拜し上げし面影を、今夢に見奉りしなるか。あゝ、懷舊の念いやまさりて、其後はまどろむことだに出來ずなりぬ。

命にもかへて惜きは鐘の音に

見はてぬ夢のさむるなりけり

いかにせんわが師の君と語りあふ

ゆめおどろかす鐘のつれなさ

○

木下つま子

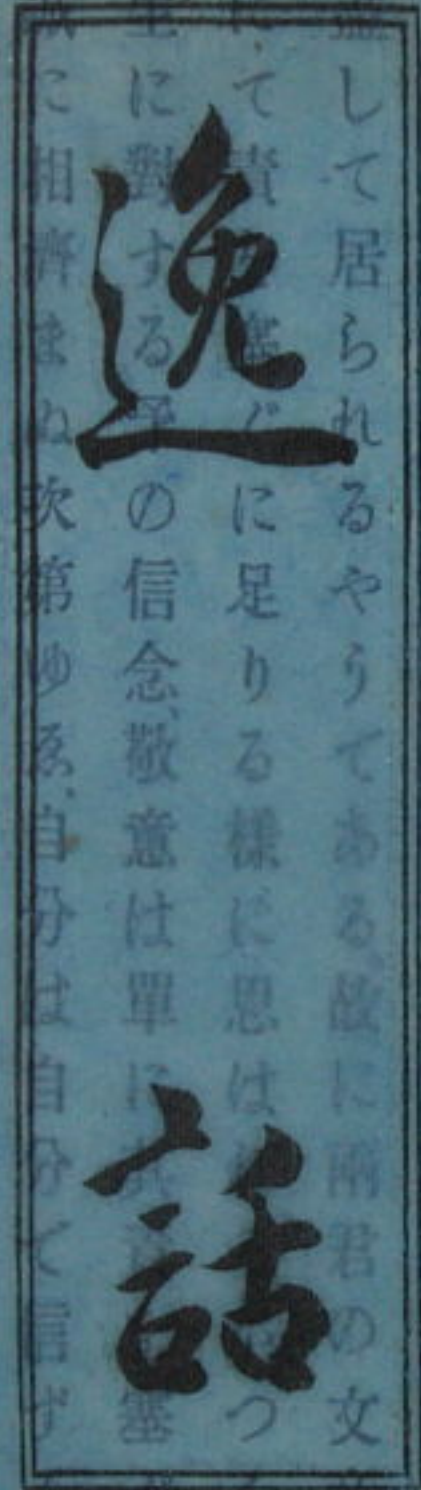
師の君の御教訓を受くる毎に、一言一句、皆感心せざるはなく、御惠の程、山よりも高く、海よりも深く、筆にも言葉にも盡し難し。我が誠實の父ともたのみ、我が成功の神とも頼みし事は水の泡。儘ならぬ浮世かな。あはれ無情。師の君には六十四歳を一期として、再び歸らぬ旅に出て立たせ給ひ、我等は云ふも更なり、師の君の幼き時より

の千辛萬苦、寢食のいとまもなく、裁縫女學校を設立し給ひ、日に月に入學の生徒も増加し、今は早や八百餘名の生徒となり、其名は海外にまで轟き渡りしとはいへ、新聞紙を見ても、人々の話しをききて、見ず知らぬ人々まで、今十年ばかり、せめては五年にてもと、口々に惜まざるはなかりき。斯の如き成功にも拘はらず、幼時の事を忘れ給はず、朝はとくより、夜はおそくまで、研究に研究を盡され、生徒に對しては惠深く、懇切なる教授を授けられし事、愚なる我等の筆や言葉にえ盡すべきにあらず。斯かる高恩を受けつゝ、百分の一も報ゆること能はざるは、實にくゝ残念にたへず、思ひ出しては涙にむせぶのみ、あゝ、惜しき師の君にてありつるかな。

教育の界

國民教育 多田房之輔

渡邊先生の逸事を述ぶるに當つて、先づ畏友小池民次、石川倉次兩君の追悼文を一讀したるに、予の信ずる所、知れる所は、既に大抵兩君が盡して居られるやうである。故に兩君の文章に連名を乞はば、それにて賡に足りる様に思はれ、予の信念、敬意は單に「逸話」と、先生に對する予の信念、敬意は單に「逸話」と云ふことのみでは、誠に相齊まぬ次第ゆゑ、自分は自分で言はず、所の二三を述べ



て、以て聊か先生に報いねばならぬと思ふ。然るに不思議にも、我と小池君と石川君とは、殆ど境遇を同じくして、先生と親しく交際をした年月も、其他種々なる關係も、大抵相似寄りて居る、(勿論多少の厚薄はあれども)故に吾等三人は恰も實子

の千辛萬苦、寢食のいとまもなく、裁縫女學校を設立し給ひ、日に月に入學の生徒も増加し、今は早や八百餘名の生徒となり、其名は海外にまで轟き渡りしとはいへ、新聞紙を見ても、人々の話しをききても、見ず知らぬ人々まで、今年ばかり、せめては五年にてもと、口々、惜まざるはなかりき、其の如き成功にも拘はらず、幼時の事を忘れ給はず、朝はとくより、夜はおそく、研究を盡され、生徒に對し、深く、懇切なる教授をせられし事、愚なる我等の筆に言葉にえ盡すべきにあらず、斯かる高恩を受けつゝ、百分の一も報ゆること能はざるは、實に、残念にたへず、思ひ出しては涙にもせぶのみ、あゝ、惜しき師の君にてありつるかな。

先生に對し、深く、懇切なる教授をせられし事、愚なる我等の筆に言葉にえ盡すべきにあらず、斯かる高恩を受けつゝ、百分の一も報ゆること能はざるは、實に、残念にたへず、思ひ出しては涙にもせぶのみ、あゝ、惜しき師の君にてありつるかな。

裁縫教育の鼻祖

國民教育社長 多田房之輔君談

渡邊先生の逸事を述ぶるに當つて、先づ畏友小池民次、石川倉次兩君の追悼文を一讀したるに、予の信ずる所、知れる所は、既に大抵兩君が盡して居られるやうである。故に兩君の文章に連名を乞はば、それにて責を塞ぐに足りる様に思はれるが、つくゞ考へて見ると、先生に對する予の信念、敬意は單に其責を塞ぐと云ふことのみでは、誠に相濟まぬ次第ゆゑ、自分は自分で信ずる所の二三を述べて、以て聊か先生に報いねばならぬと思ふ。

然るに不思議にも、我と小池君と石川君とは、殆ど境遇を同じくして、先生と親しく交際をした年月も、其他種々なる關係も、大抵相似寄りて居る、(勿論多少の厚薄はあれども)、故に吾等三人は恰も實子

の如き關係を有して居るが、圖らずも此の三人が打揃つて、先生の柩をお送り申すことの出來たのは、吾々に取りて實に満足の至りである。其三ッ栗の中の一なる予が、殊更に連名が出來なくて、別に叙述すると云ふことは、甚だ六ッかしいのである。先生は實に我が千葉縣出身の教育者、第一流の人物であつた、又千葉縣人としての一大成功者であつた。これは先生が宏大なる校舎を建設したり、地所家屋等を澤山に有して居られるなど、所謂財産の點を以て比較して、しかいふのではない。(其點に於ても一流なれど)先生が夙に中央部に身を置いて、日本全國に與へたる女子教育の偉大なるを云ふのである。予が同僚の一人が、嘗て先生を評した言に曰く、

「千葉縣からは大臣以上の人物が出た」と、そは誰かと問ふに、「渡邊先生なり」と答ふ。其理由を問へば、「先生の一ヶ月の収入は、千五百圓乃至二千圓である。總理大臣と比するも、豈に劣るべけんやと云々」と。

成る程、これも一理ある事ではあるが、予は敢て渡邊家の財産如何

によりて云云するのではない。試に先生が裁縫の教師として天下に立ち、三十餘年の間、或は自宅に於て、或は講習會に於て、或は傳習所に於て、或は研究會に於て、又は私設の裁縫女學校に於て、養成された生徒を、初めから勘算すれば、實に幾千人なるかを知らぬ位で、其生徒が母校を出て、後、或は家政の長となり、或は學校の講師となりて、更に多くの弟子を教授せしことを考ふれば、これ又幾萬人なるかを知らず。この功績既に偉大なるに、剩へ先生は夙に裁縫書を出版して、大に斯界に利便を與へられた。其書中には裁縫獨習の書もありて、山間僻地の人と雖も、坐まがにして直に其秘法を悟り、天下無数の女子が利益を受けしことは、實にどれだけなるか知れぬ。猶又先生の著書が學校の教科書となりて用ひらるゝ等に就て考ふるも、先生が或は直接に或は間接に、天下の女子を教授せられた其功績は、實に驚くべきものである。されば先生は教育家としても、女

子技藝界の達人としても、大人物と認められ、成功者と仰がるは當然のこととて、先生の御満足、否吾々の光榮は之に過ぎぬのである。猶附言したい事は、先生の人と爲りてある。予の如き多くの髯男が、裁縫の先生に敬服して、三十餘年間も其徳を慕ひ、其行を見習ふと云ふことは、他に其例を聞かぬのである。それだけを以ても、既にその人格の並々ならぬことが分かる、思ふに學校の教師、その他すべての業を授くる人は、よく教材を授けると共に、又己れが生氣を吹き込むことの感化力が強ければ、假令教授の時間は少なくとも、年限が長からずとも、其結果は却て偉大なる事が知られるのである。殊に先生が最初教授されたのは、女子師範學校の生徒であつて、是等の生徒は、何れも卒業後地方に赴いて、各幾多の生徒を取扱ふ人々である。その人々に裁縫の秘術を傳へ、教育者としての美質を與へた影響は、實に莫大なるものである。

猶敬服に堪へない事の二三を列擧すれば、先生は初めよりよく人を信じた爲に、亦よく人に信じられたのである。彼の眼光炯々、人を射る風貌に接しては、誰も油斷をせない、然るに其目に映じて交際する人々は、直に赤心より事を語る、この邊は餘程妙で、先生の目はあれ程、鋭かつたけれども、交際する人々は其目より發する慈愛の光に照されて、一種云ふべからざる快感を覚え、加ふるに先生の一言一句、皆肺腑より出づる親切なる言葉に對しては、何人も心服せざるを得なかつた。是が即ち社界に信用を置かれた大原因である。次にすべての考が、近く目前にあらずして、遠大なる所にあつた。何事もあまり口へは出されなかつたが、其やり方が自ら證明して居る。彼の多くの慈善事業、公共事業にも賛成して、或は物品を、或は金錢を寄贈せられたのは、偶然ではないと思ふ。要するに先生は、小成に安んずると云ふ精神は毛頭なかつた。終に一言したきは、裁縫は

元來個人的教授のもので、よし同時に教授するにも、五人十人が止まり位のものである。それを團體教授法を工夫して、生徒にも解し易く、教師も教へ易く、而して成るべく早く教授の功果の現はれる術を發明されたのは、全く先生の卓見と云はねばならぬ。殊に昔は裁縫教授は、三年なり五年なり通はねば、その秘傳を教へなかつたものである。然るに先生の裁縫書が一たび世に現はるゝや、其弊風が忽ち打破されて、滿天下の婦女子がどれだけの恵みを受けた事か分らない。先生の門下より幾千万の孫弟子が出たのも、一に此團體教授法の賜である。實に先生は我國裁縫教育の鼻祖である。大成功者であると云はねばならぬ。(編者筆記)

親切と成功

千葉縣東金高等女學校長

小池民次君談

アレも一つの逸話でせうネ、多分明治八九年頃でしたらうが、初めて小學校で裁縫を教授したなどは、余程面白い事で、恐らく其時分に日本國中で、小學校の裁縫科教員と云つたら、渡邊先生一人でしたらう。故に當時先生は、其教授法について非常に苦心をしたものです。即ち時の校長や首席教員に一々相談をかけられたので、校長初め其他の教員も、大へんに弱つたさうです。渡邊君には弱る、熱心で一々相談をかけるが己れにはチットモ分らない、とて深く頭を悩まして居つたと云ふ事です。是等は先生が、どうかして分る様にしてやりたい、早く斯の道を傳へたいと云ふ獻心的のあまり、一方の人を困まらせたのであります。

それから先生の亡くなられる少し前でした、私が一度學校へ参りました時に、校内を偶々まで、残らず案内してくれられました、その時私が、先生は千葉においての時から、斯う云ふ學校を作る目的

であつたかと御尋ねしたら、イヤそんな目的は更に無かつたが、知らず識らずの間に、コンナになつてしまつたと答へられました。全くそれに相違ありません。そして先生は、實に達人でした。元來人間が達人であつた、人を見る目が中々非凡でありました。一度か二度逢うて、アレは人物だと云はれると、其者は必ず人物です。ネー。此點は學者だの博士だのと云つても、アーは行きませんよ。要するに人間が非凡でありました。殊に又親切でよく人の世話をしたものです。全くあの親切が衆望を得た原因ですネー。嘗て私が那珂先生に出逢つた時に、斯う云ふ話が出ました。なんでも婦女新聞社へ、渡邊先生に對する悪評の原稿が來て居たらしいので、主筆が那珂先生を訪問して、渡邊先生のことを根ほり葉ほり尋ねた。那珂先生は渡邊君は決してそんな男ではない、なか／＼親切であつて、慈善事業や公共事業にも、よく金錢を寄附して、大に助

けて居るなど、實例を擧げて懇に説明をせられた。所が主筆福島四郎と云ふ人は、元來クリスチャンで、人をわざと傷ける様な心はない、爲めに深く感じて、遂に其紙面を汚さなかつたと云ふ事である。渡邊先生の成功に對しては、随分そねみを起したのも多からうと思ひます。こんど先生が亡くなられたに就て、恐らくは欣然、眉を動かした人が幾らもあつたらうと思はれます。是れが浮世の凡人の弱點でありませう。(編者筆記)

渡邊先生の經濟觀

千葉縣靜和女學校長 白井勇次郎君談

渡邊先生が初めて長南小學校で、女子に裁縫を教授せられたと云ふ事は、殆ど日本全國中で、小學校裁縫教授の先登と見てよからうと思ひます。先生が小學校で裁縫を教授するに、色圖も教へられま

したが、これは女生徒に色彩の辨識力を養成する目的で、直接には衣類の色彩を辨別せしめ、間接には色の配合等、色彩に關係する美術心を養成せしめんとしたものと思ひます。これは當時、有名なる教育家の小出三平氏（この人は鶴舞藩の士族で、二三年前まで郡視學をして、當地に居られた）の畫策に出たものであります。

渡邊先生は、この小出氏に對して、その頃、頻りに裁縫上の相談をせられたので、小出氏も非常に先生の熱心に感じ、共に裁縫教授の考案に夜を更かしたこともあるさうです。其結果が千葉縣廳の注目を引き、明治十二年の春でしたか、千葉の女子師範學校へ榮轉せられました。それから、お目にかゝる機會もなかつたので、その後の事は一向に存じませぬが、何しろ今より三十餘年も前に於て、既に女子技藝の發達に着眼し、其間に幾多の困難を排して、遂に成功せられた、その功績は實に大なるものであります。

先年私が東京裁縫女學校へお伺ひ申した時に、先生の御案内で校内の各室を見せて頂きましたが、恰も増築の際でお忙しい中を、大へん御親切に御案内を受け、且つ快く話して下さいまして、非常に満足した事があります。

その時、室内の一隅に澤山の紙が積んでありましたから、「アレはどうなさいますか」とお尋申したら、「これは著書に用ひる爲めの紙で御座る」と仰せになりましたが、聞く所によれば、紙問屋が賣先に困つて持て餘す時は、先生の所へ頼んで來る。それを先生は氣毒に思召し、商人も亦其好意に感じ、格別安く賣拂ふと云ふ風であつたさうですが、是等は又、先生の經濟觀として感心した事でありました。

（編者筆記）

教授法の恩人

東京裁縫女學校講師 伏見藤三郎君談

これは是非載せて頂きたいと思ひます。これまでどの雑誌を見ても、渡邊先生が女子職業學校を創設なすつた事が出て居りませんが、御承知の神田區一ツ橋通にある共立女子職業學校は、最初渡邊先生がお設けなすつたのであります。實に先生があつたればこそ、アノ學校は今日の如く盛大を來たしたのであります。その始め先生は、御自宅の生徒を悉く連れて行つて、授業をお始めになり、從て漸次入學生を得た様な次第でありました。當時は未だ女子の技藝教育が發達して居りませんので、教授法については、どの教員も大へんに困難を感じたものです。所が先生は、女子は斯う云ふ性質のものであるから、斯様に教へねばならぬ、貴人の令嬢に對しては、斯

様な態度を取らねばならぬとか云ふことを、極めて親切に、各教員にお教へなすつたものです。尙又學校の經濟上から教員の俸給が極めて安く、其時渡邊先生が十圓、私が八圓で、中には一ヶ月に僅か一圓、或は二圓位の教員もありました様な次第で、教員は何れも困つて居たのを、渡邊先生は、御自分の俸給を無い物にして、女子技藝教育のために盡されました。かく先生は女子職業學校のために、どれだけ人の知らない苦心を嘗められましたか知れませぬ。それゆゑ教員は、辭職がしたいながらも、學校の爲め否、渡邊先生の爲めに、一生懸命に働く氣になつたのであります。私は始め造花の教授法に大へん困りまして、僅か三人の生徒を教へるのに、一日かゝつても完全に教授が出来なかつたので、非常に迷惑をして居ると、渡邊先生が仰せになるには、

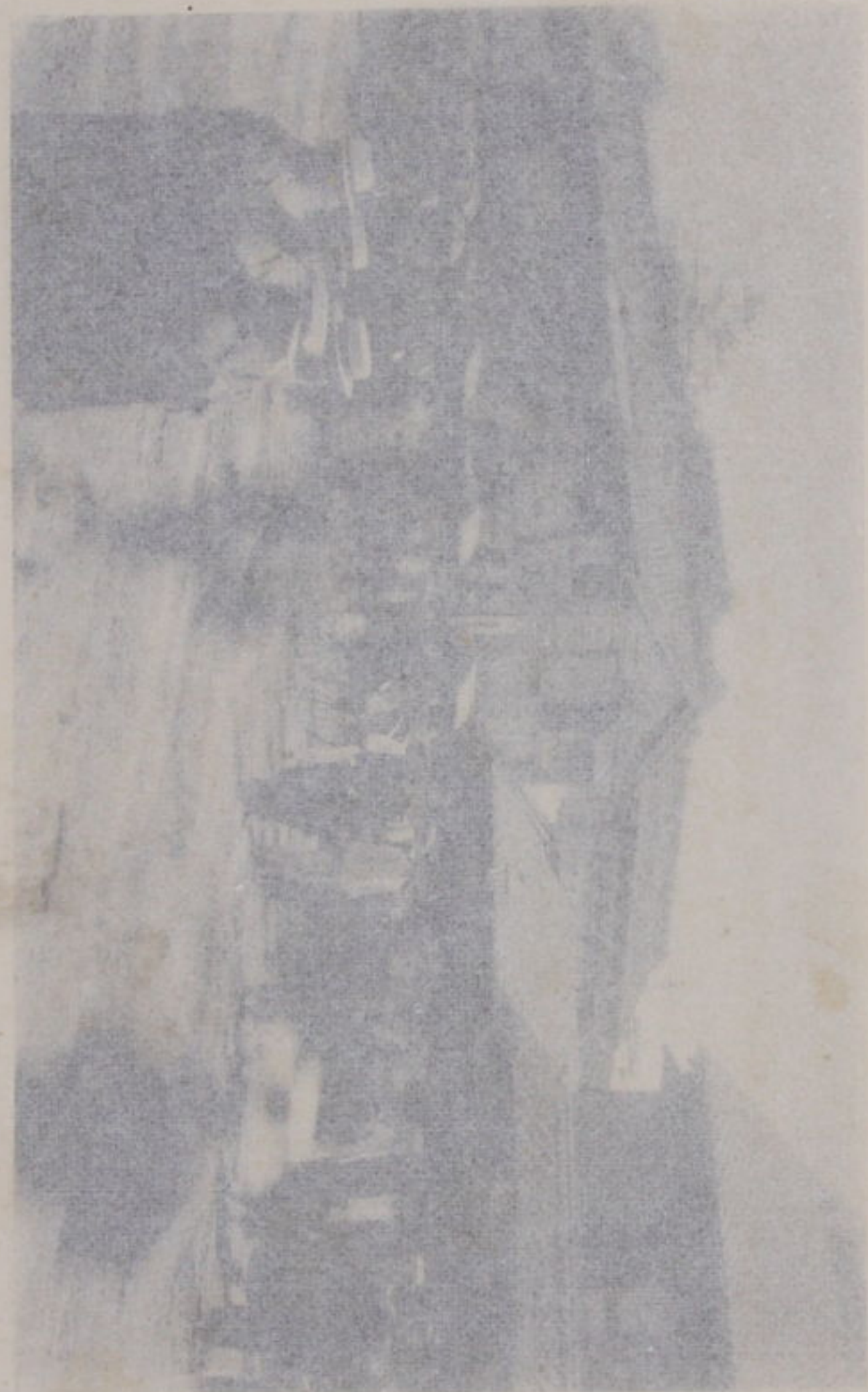
この忙しい世の中に於て勉強するのだから、成るべく年月を短

くして、成功する様にせねばならぬ、先づ裁縫を教授するには、斯うするのだ、

と赤糸を以て白布に縫はせた順序を見せて下さいました。

私は成程と悟る所があり、先生の裁縫教授法を宜しく造花に應用すべしだと思つて、先づ生徒に花の實物を示し、其萼、花瓣、雄蕊、雌蕊の各部を説明して、それ〱造り方を教へ、最後にこれを集めて一つの花として見せましたら、これが尤も生徒に分り易くて、殊に早く技藝を教授し得るやうになりました。それで最初は三人で困つたのが、その後は六七十人の生徒を引受けても、容易く教授し得る様になりました。

嗚呼、先生は私に取りて、教授法の恩人でありました。(編者筆記)



くして、成物する機にせねばならぬ。成物を教授するには、斯うするのだ。

と赤糸を以て白布に縫はせた順序を見せて下さいました。

私は成物を繕る所がある。先生の裁縫教授法を宜しく習定に應用すべしだと思つて、先づ生徒に花の實物を示し、其考を説き、裁縫の各部を説明して、それ／＼造り方を教へ、最後にこれを縫めて一つの花として見せましたら、これが尤も生徒に分り易くて、其に早く裁縫を教授し得るやうになりました。それで最初は三人で困つたのが、その後は六七十人の生徒を引受けても、容易く教授し得る様になりました。

嗚呼、先生は私に取りて、教授法の恩人でありました。(編者附記)



(四北) 列 行 盛 葬

故校長の逸話

未亡人 渡邊邦子君談

私が初めて校長(辰五郎)に嫁したのは、明治二年四月廿八日でありましたが、それから今日までの間には、二人共に随分難儀を致しましたよ。

結婚當時の家業は呉服、箆、火鉢、膳、椀などを賣る傍、仕立物をして居りましたが、其時分はまだ私が全然室にあはなかったので、校長は一人で氣を揉みました。店の方は随分商賣がありました。が、何分校長がお人よしでしたから、彼方此方と貸金が出来て、人に損をかけられた事も少なくありません。その頃でした、井上河内守の御用を仰せつかつて、非常に信用を得、遂に家人として連れ歸るとまで仰せられました。が、何分さう云ふわけにもゆかないので、甚だ残念

に思召された様でした。當時既に自宅に於て裁縫を教授して居りました。が、明治七年始めて長南町の小學校へ出勤することになりました。裁縫教科書編纂の苦心はこの時であります。長南町の長圓寺の本堂の脇の八疊室かを借りて、此處で編纂しました。其前は内に居て、チヨイ〜研究して居りましたが、机に向つて考へ込んでる最中などには、何を云つても口をきかなくて、よわつた事があります。ひどく尋ねると、却て怒られたものです。

雛形尺の發明も此時でありました。校長が自分で竹を切つて來て、鑢で筋を付ける。それに私が墨を入れて、尺度を明瞭にすると云ふ風でしたが、それを只で生徒に渡ししました。どうも田舎の事ですから、餘程經濟にせないといけませんからネー。其時に祝着の注文を、約束の日限までに仕立るとして非常に忙しく、或夏の如き三四晩

も、床を取つて寝たことがありませんでした。それで可笑しい話があるのです。蚊帳の中で夜業をするのに、洋燈の油煙がこもつていけない。ツて、蚊帳の真中に孔を明け、それに竹節を抜いたを挿し、其竹の下端は、是を火家に嵌める様にして、油煙抜きを拵へたのです。それで

竹の煙突だなんて、大笑をしましたよ。蚊帳の中へは、塾生の能く出来るのを三四人づゝ交るゝ入れて、それを相手に仕立物を勉強しました。その後鶴舞小學校に出勤することになつて通ひました。が、それこそ、雨が降つても、照つても、毎日必ず。

草鞋で通勤。いたしました。それで月給は、一文も貰はないのです。裁縫を教へるのが面白いのと、學校の爲めになればよいのとて、全く只で勤めて居りました。それから明治十一年から千葉縣女子師範學校へ出勤することになりました。

自炊生活　をやつた時にも面白い話があります。アレは千葉東町のどことかの家で、師範生の今關某さんと二人で、同居自炊をしたそうですが、今關さんを殆ど弟の如く愛して、出来るだけの世話をしてやつたそうです。所が御飯は、交代に焚く筈であつて、或時校長の番に當つて居るのに、焚いて無いから、御飯はどうして下さるか尋ねられた時、御飯を焚いてる間に、衣服が一枚縫へるから、時間が惜しい。焼芋でも買つてお食べ」と云つたさうです。又或日の事に、御飯は今關さんがたいて、校長がお葉漬を切る役であつた、その時に、庖刀より剪刀がよいつて、剪刀でヂョッキ、切つたさうです。千葉の師範學校へ出て居る時分に、私か一人留守して居るから、夜分は私の父なり母なりが、交るゝ泊りに来てくれました。雨の降る晩などは、跣足になつて来て呉れました。そして私に主人の留守中は、成るべく經濟にして、出来るだけお錢を残す様にせよと

云はれたので、私も三年間に随分お錢を貯めましたよ。校長の月給が千葉で貰ふだけでは、どうしても足りないので、月々私の方から幾らかの継ぎ足しを致しました。素より月給を望んで行つたわけではありませんから、偶々二圓三圓と持つて歸つたと思へば、又五圓なり十圓なり、店の金を持つて行きますので、本統に困りました。千葉へは私も、年に一度位は必ず行つて、試験の調べを手傳つてやりました。

若い時は疝癪持　で口よりも握拳が先へ立つ方でした。或時も千葉から歸つて来て、何か御馳走をせいと云ひました、けれども店の方が忙しいので、御馳走なんかして居られない、直ぐ隣が旅館です。から、お魚を誂へたのです。それが氣に入らなくツて、座敷(私の仕事をして居る所)へ芋の袋を持つて来て放擲したので、座敷で芋がころがる　やら何やらで、大へんな騒をした事があり

ますが、それでも、千葉に三年間居るうちに、餘程直りました。この外にまだ可笑しいのは、

二人が井戸へ落ちた。ことです。勿論、幼い時の事で、又同時と云ふのではありませんか、校長は少年時代に笥を折るとて、一生懸命に引張つて、その抜けた途端に、後の井戸の中へ仰向に落ちたさうです。又私は娘時代に、井戸浚渫を見に行つて、井桁につかまつて居る間に、手が這つて落ち込みました。下に笠を被つて居る人の頭の上へ……さて今から思へば、校長も實に可愛想でありました、親には早く別れ、兄弟共に離れた上に、親兄弟の借財を悉く一身に引受けて、利息は一文もまけて貰ふと云ふことをせず、スツカリ返して仕舞ひ、そしてマーお蔭様で、学校もこれ迄に致しましたが、仕立屋奉公に入りて以來、亡くなるまでには、どれだけの辛苦を嘗めた事か知れませんか。或る年の事でした、郷里に於て某店の番頭四人が失策

する所を、自分一身に其責を負ひ受け、家に有る丈の金錢をスツカリ出して仕舞つても、まだ五十圓の不足になる。それを自分の借用證文にして置くと申しますから、そこで私が、それよりは一時に返した方がよいから、あなたも衣服をお賣りなさい、私も賣りますからと勧めて、

二人が衣服を賣る。ことになりました。時に校長は一重と羽織とを賣り、私も一重と丸帶とを賣つて、漸く五十何圓の金が出来ましたから、それでスツカリ返済した事があります。只今斯うやつてお話をして居ても、何となく其時分の事が忍ばれます。

茲に至つて余は思ふ。故校長の一大成功は、是れ實に夫人邦子女史が、能く内助の力を添へて、以て今日あらしめたものなることを。

亡父の鎌倉遊

在鎌倉別邸 熊谷千代子君談

御承知の通り、父は日々忙しく働いて居まして、時々この静かな田舎に参る事を、何よりの樂しみにして居りました。そして一番の樂しみと致す處は庭いぢりで、いつも此地に参りますと、お茶を飲む暇も無く、直ぐと跣足、端折と云ふ姿で、草取りから、植木の世話、鳥小屋の掃除まで、皆自分で致し、其間には又、私共や下女と一緒に、つて、臺所の仕事まで助けてくれました。かく土曜から日曜にかけて、極短い間を少しも休む事なく働きつめて、歸りはいつも汽車の時間間に合はぬ位でありました。私共から見ますと、毎日東京でいそがしく働いて居るのですから、せめて當地に参つた間だけでも、ゆつくり休んだらと存じて、勧めましても、働き好きの父は、少しの

間もちつとして居る事が嫌いで、いつも――當家に着くから歸るまで働き通してありましたが、是が又何よりの保養だと申して、食事がおいしい、東京の倍も食べられる」と、何時も喜んで居りました。こんな事を申し上げると自慢の様であります。父が慈愛心に富んで居た事は、慥かに普通人以上と信じて居ります。ふだんの事は申す迄も御座りませんが、私の一番深く感じましたのは、先年私が大患にかゝりました折、御座りました。二三の醫師に見ばなされたにも拘はらず、只今弱いながらも、斯うして居る事の出来るのは勿論、醫藥の力も御座りませうが、全く父の愛が私の病氣を癒したものと深く信じて、實に有り難く感謝して居ります。當時父は非常に忙しい中を、度々病床を見舞ひ、食物を與へ、時には按摩までしてくれました。其度に私は病苦を忘れ、只々父の愛にほだされて、有がた涙にむせて居りました。

父に去られて後も、私が一番苦しく感じますことは、私と同病で逝きました事で御座ります、何となく私の代りに立つてくれました様な心地がして、もつたいない様な、有り難い様な、申譯ない様な、實に何とも言へぬ感じが致します。

最後の鎌倉遊びは、昨年四月二十八日で御座りました。教員一同が當地に遊ばるゝとの事で、多分兩親も參る事と、楽しんで待つて居りました。そして父は田舎風の食物が好きで御座りますから、幸ひ其頃妹も參つて居ましたゆゑ、草だんごをこしらへる事に相談が出来、是ならば兩親ばかりでなく、皆様も御喜び下さる事と、前日から摘草にいそがしく、いよゝゝ其日になり、私共は御馳走の仕度をして居りました處へ、もう皆様はお着き遊ばしましたので、急ぎ御迎へに出ましたが、父は見えませんが、他の人に聞きますと、兩三日前から工合が悪くて來られぬとの事で、大に失望致すと同時に、只

今までの楽しみは忽ち去つて、心配でたまらなくなりました。それにしても、どう云ふ御様子かと噂して居る處へ、一汽車後れて思ひ掛けなくも、父は一人で私が常に愛して居る西洋スミレと、他に名の知れぬ西洋種の植木とを持つて來てくれました、私共は嬉しくて、生れ代つた様な心地が致しました。

殊に案じたより大層機嫌が能くて、私共のこしらへて居た「草だんご」を見て

是は何よりの思ひつきだ、全く田舎らしい御馳走で、東京などではこんな綺麗な青々したのは、とても食べられぬ、どれ出來たてを貰ひませう。

とて、二ツ三ツ召し上り、

ア、珍らしくておいしい、實によく出來た、皆の骨折で特別味が宜い、近頃は是程おいしいと思つて食べた物は無い、有り難

い〜。
と、其聲と云ひ、其顔といひ、其様子といひ、今も猶ほあり〜と見えます。

「草だんど」を食べ終るや、直ぐ庭に出て、唯今持つて參つた草花を植木鉢に植ゑて、

菊が大分、大きくなつたから、根分をしてやる、

とて、他の場所に移し、病體で有りながら、いつもに變る事なく、働きますので、私共は疲れる事を恐れて、幾度か止めましたが、

何、今日は大分氣持が宜い、實に此頃にないよい心持だから心配するな、田舎に來ると頭が軽くなつて、氣が清々して、ほんといゝ工合だ。

とて、なほも働き、食事の時になつて、一寸仕事をやすみ、皆と一緒に愉快に食事をすまして、又直ぐ植木の手入にかゝり、夕方近く歸る

まで、手も足も泥だらけになつて働きづめ、かくて車夫にせかれ大急ぎで歸京しました。

此時父に頂いた植木は、とろ〜形見となりました。そして不思議にも、十一月中旬から十二月末頃まで、寒さにも負けず、可愛い花が咲き通してした。昨年父が植ゑかへてくれました菊も、此頃は大分大きくなり、恰も根分けをしてやる時になり、又父が手植の東家の前の小松四五本も、特更に父を思ひ出す様で御座ります。(編者筆記)

忍耐と嗜好物

畑井しん子君談

亡くなつた父に就て、私の感じて居ますのは、忍耐力の強かつたことです。學校がアレまでになつたのも、全く忍耐の結果が形に現はれたのではあるまいかと思ひます。また父が同情心に富んで居た

ことは、下男や下女に對する言語動作に依つて、常に感じて居りました。

先年私が渡米の折にも、父は病氣中であるのに、わざわざ横濱まで見送つてくれました。その時は皆の者が、婦人の一人旅だからつて、大さう心配をしてくれまして、母などは随分に氣を揉みましたが、父ばかりは少しも心配の色を顔に出しませんでした。これは私が心を強むる上に於て、大なる力となりました。

在米中も時々好きな物を送つてくれましたので、私は一日も日本を忘れた事なく、又父を思ひ出さない日とはありませんでした。歸朝後は殊に私共を愛してくれましたので、私も亦及ぶ限り孝養を盡したいと存じて居りました。それで父の口に適する物、心を慰むる物、目を喜ばしむる物、耳を楽しましむる物等について、常に注意をして居りましたが、父の嗜好物は種々あるので御座います。

第一義太夫、これは非常に好きで、毎晩でもよいと申しました。

父は語るのではなく聴く方でした。

第二盆 栽、草花が大へんに好きで、殊に薔薇、堇、菊などを愛しました。

第三古道具、古道具屋の店先に至ると、立ち止まつて容易に動きませんでした。

次に食物では、三度が三度でもよいと云ふのは、大根の煮たのです。なほ野菜物の中では、ホウレン草、ゼンマイ等を好みました。父がよく注文した物は、手打蕎麦、マグロの握り、マグロの刺身、牛肉、トロロ等でありました。果物では、林檎、密柑位で、柿や梨も少しは食べた様です。

亡くなる前年(三十九年)の秋十一月頃に、私がフレンチトーストを作つてあげた處が、これが大さう口に適したと見えて、昨年(の五月

入院前まで、引續き食して居りました。マ一父の嗜好物は、大略此位な物で御座います。

私がお料理の研究中に亡くなつて、種々手製料理のお加減を、父に聞く事が出来なくなりましたのは、實に残念に存じます。

(編者筆記)

所 感

東京帝國大學教授理學博士 坪井正五郎

此度渡邊辰五郎氏の追悼録が出版される運びに成つたに付いては、私にも何か一文を寄せる様にとの望とが有りましたので、編輯も畧ぼ結了の後、花足と思ひました。然し、先生からも薫氏からも重ねての依頼を受けましたから、此所に筆を執る事に致しました。私の今までは、居つたのは、決して、所感が少いと云ふ爲めには、無く、彼の事も此の事も既に他人が述べて居るて有らう、自分よりも適當な人が有るべきに自分が名乗り出す必要も無からうと考へた爲めで有ります。併し退いて案じますに、何事でも常の事と成ると慣れて氣付かぬと云ふ場合も有ります。假令ば最も好きな食物は何かと云ふ間ひに封し、米の飯を算へる事を忘れ

入院前まで引續き食して居りました。マ一父の嗜好物は、大略此位を物で御座います。

私がお料理の研究中に亡くなつて、種々手製料理のお加減を、父に聞く事が出来なくなりましたのは、實に残念に存じます。

(編者筆記)

纂

天恩

所 感

東京帝國大學教授理學博士 坪井正五郎

此度渡邊辰五郎氏の追悼録が出版される運びに成つたに付いては、私にも何か一文を寄せる様にとの望とが有りましたので、編纂も畧ぼ結了の後、蛇足とは思ひましたが、滋氏からも薫氏からも重ねての依頼に接しましたから、此所に筆を執る事に致しました。私の今まで差扣へて居つたのは、決して述ぶべき所感が少いと云ふ爲めでは無く、彼の事も此の事も既に他の人が述べて居るで有らう、自分よりも適當な人が有るべきに自分が名乗り出す必要も無からうと考へた爲めで有ります。併し退いて案じますに、何事でも常の事と成ると、慣れて氣付かぬと云ふ場合も有ります。假令は最も好きな食物は何かと云ふ間ひに封し、米の飯を算へる事を忘れ

ると云ふ様な事も往々有る事で、私の記さうとする所も、或は此類で有らうかと思ひます。よしや人の云つた所にしても、繰り返しは厭ふに及ばず、若し云ひ残した所で有るならば、述べて置く要は一層強い譯で有ります。

故辰五郎氏の勤勉熱心や忠實や篤行に付いては、苟くも氏を知る人の等しく認める所で、今更功績を喋々するを要しません。が、是等は寧ろ一個人としての行ひに關する事で、欽慕者の爲め模範に成るとは云ふものゝ、其結果が直接に他の人を益すると云ふ事は有りません。私の云はうとする所は、間接に世を利した是等の性行では無く、直接に人に感化を及ぼした同情の事で有ります。氏の溫和なる容貌態度は見るからに同情の念に充ちて居る事を示すものでしたが、音聲と云ひ、語調と云ひ、總て同情の響きで有りました。氏は私の採集し、整理した物を見、研究し、考證した説を聞き、好く緻

密な穿鑿をなさいました。必要も有り、面白味も有る事でせうが、頭を使ひ過ぎてはいけません。身體が大切です。類の少い事を爲てお出でなので、殊に御注意なさるが宜しう。と奨励と慈愛とを籠めた言葉を發せられた事が有りました。又工科大学失火の時、折柄火元に程遠からぬ建て物に於て、人類學標本展覽會開催中で有つた所、氏は翌朝早く見舞ひの詞を送られ、尙ほ其後面談の際、あの火事で多年御苦心の結果が煙に或つて仕舞ひはしなかつたかと實に心配して居ましたが、マアマア御無事で結構でした。とて、心から憂ひ心から喜ばれた様子が見えました。

縦覽案内の挨拶、近火取り込みの見舞ひ、之に似た言葉は他の人の口からも出るべき事では有りますが、氏の口から出た言葉は、特に強く私の腦裡に彫り込まれて居るので有ります。何故に左様で有るか、と云へば、深い同情が伴つて居るからで有ると信じます。同情

は心と心とを繋ぐもので有つて、一方の心に起こつた感じは容易く他方の心にも傳へられるもので有ります。前の話しは僅な例で、且つ一私事に止する事では有りますが、之を以て他を推す事も出来ると思ひます。

氏が世に處するに同情を以てし、人と交るに同情を以てし、人を用ゐるに同情を以てし、人を導くに同情を以てされた事は、其例に乏しく有りますまい。否、夫れが平常で有つた、夫れが生命で有つたと申して宜しいで有りませう。身自ら斯かる場合に出會つたら如何で有らう、身自ら斯かる地位に立つたら如何で有らうと人の事を我が身に引き當て、思ひ遣りをすると思ふは、誠に美しい心掛けでは有りませんか。思ふに氏の同情を受けた者は、具體的精神的幸福を得、若しくは感情的の慰安を得たのみならず、知らず識らずの間に感化されて、同情心の發達をも促され、随つて人格をも高め

た事で有りませう。

氏は小鳥を愛して飼育し、草木を愛して培養されましたが、私はこれれも亦同情の餘波が小鳥や草木にまで及んだものと思ふので有ります。

故渡邊辰五郎氏の生涯を一言で云ひ表すには、親切と云ふ語が最も適當で有ると私は信じます。

會 葬 記

日本中學校教師 副 島 海 濤

故私立東京裁縫女學校長渡邊辰五郎氏の柩は、六月二日午後二時と云ふに、本郷東竹町なる學校を出て、上野谷中の基地に永く磐隠りぬ。己も其の靈柩を送る人の列に加はらんと、午後の一時に先づ學校に到れば、門前には幾十臺の造花、生花、幾籠の放鳥、龍燈、提燈

など、所狭きまで連ねありて、北は本郷大通りより、南は順天堂病院の裏に至るまで、轎を並べたる幾百輛の車は、さながら堀を築きたるが如く、此の所より送葬の列に加はらんとする人々は、京華中学校の庭にしつらひたる休憩所より溢れて、此處彼處に休み、受附口の繁忙は、今や係りの人の目も廻らんばかりなり。又校内には、千餘の生徒皆しめりがちにて、各定めぬの室に、いと静肅に控へ居たり。やがて奥の方に讀經の聲起りて、柩は今や千辛萬苦、身命を以て築き建てたる學校に、最終の名残を留めて、既に校門外に出でられたり。こゝにて列を造り、前驅二人は悲しき中にも甲斐なくしく出たち、次に白旗、高提燈、生花、造花の數十臺は、白丁の手に捧げられ、地主及町内、重だちたる人々之に續き、迎僧三人は車にて導き、龍旗二竿を隔てて、未亡人とし子、千代子、かをる子、静枝子の君たちは、各香爐、生花、位牌などを抱きて、之に續き、提燈二臺をおきて、故東京裁縫女

學校長渡邊辰五郎氏之柩と大書したる銘旗は、力なげに翻りたり。さて靈柩は、造花龍燈を前後にし、棚橋、御園生、鹽澤、小池、石川、多田の人等に、左右を守られて進まれぬ。嗚呼、昨日までは人わざもて仕へしに、交はりしに、今日は斯く神わざもて送り行くことの悲しさ。況して後につゞける喪主及び親戚の人々の心の中や如何ならん。生徒千餘名は四列に並び、受持教師に牽ゐられて其の後に従ひ、次は一般會葬者なり。列の長さ十町に及び、本郷通りを左に森川町に至り、大學に沿うて右折し、池の端七軒町を経て根津大通に出で、見返橋を渡りて右へ善光寺坂を登り、三時過る頃、柩は式場に着かれたり。

さて又、谷中の式場にては、門内に三張の大テントを張りて全庭を蔽ひ、金子、水谷及び某屋の三家を休憩所に充て、門の側に受附所を設けたり、柩を此所に迎ふる人々は、午後一時頃より續々として來

り、頗る繁忙を極めしも、些の雜鬧なく、或は式場内に、或は休憩所に控へて、靜かに柩の到着を待ちたりとか、柩の式場に着きてより、數千の生徒、會葬者の各席に着くまでには、約一時間を経ぬ、千餘の生徒の師を葬る悲み、師に盡す敬ひは、蒸すが如き暑さと、煙るが如き塵とを冒して、傘をも翳さて、涙を拂ひつく、従ひ來るいちらしさを、柩の佛は如何に見給ならんと、一しほ人の涙を添へたり。

伴僧の撃つ鐘に式は始りて、嚴かなる讀經の聲、導師の引導、形の如く終り、那珂博士の誄辭、教職員卒業生總代天具さく子、生徒總代野村なか子、大日本女學會々長鍋島榮子の弔辭を終り、其他數十の弔詞弔歌は柩前に供へて、喪主未亡人より一般會葬者の焼香を終へたるは、五時に近き頃なりき。またく、燈火立ちのぼる煙、消えて還らず、散りて戻らず、悲しいかな。



り、頗る繁忙を極めしも、些の雜聞なく、或は式場内に、或は休憩所に控へて、靜かに柩の到着を待ちたりとか、柩の式場に着きてより、數千の生徒、會葬者の各席に着くまでには、約一時間を経ぬ、千餘の生徒の師を葬る悲み、師に盡す敬ひは、蒸すが如き暑さと、煙るが如き塵とを冒して、傘をも翳さず、涙を拂ひつく、従ひ來るいちらしさを、柩の佛は如何に見給ならんと、一しは人の涙を添へたり。伴僧の撃つ鐘に式は始りて、嚴かなる讀經の聲、導師の引導、形の如く終り、那珂博士の諒辭、教職員卒業生總代天具さく子、生徒總代野村なか子、大日本女學會會長瀧島榮子の弔辭を終り、其他數十の弔詞、畢くは、柩に控へて、喪主未亡人より一會葬者の燒香を終へたる時、五時を過ぎ、燭をりき、またしく、燈火立ちのぼる、煙消えて還らざる、哀しむ、悲しいかな。



(五 共) 列 行 儀 葬

渡邊先生と廳南小學校

千葉縣長生郡廳南高等小學校長 古山修司君談

渡邊先生が長南小學校(明治六年八月の創立)に奉職になつて居たのは、明治九年頃で、恰も小出三平氏(此人は當時の校長で、各校教授法監視として有名なる教育家)と同時代であつた様に思はれます。その時分の教員は、池田誠庵、長尾芳季、白紙友吉の三名で、學科は讀方、習字、算術、即ち讀、書、算の三科目でありました。それに「マ」渡邊先生が裁縫を教授されたと云ふ事であつたと見えます。

一體長南と云ふ「長」の字ですが、これは只今は「廳」の字に代つて居ります。先生が御在職の當時は、「長」の字でありました。その代つた理由は、明治二十年に長南宿、坂本、藏持の二村一宿を合併して、武丘村と改稱し、後、明治二十三年三月十二日、武丘村を廳南町と改正すると同時に、廳南尋常小學校としたのであります。私が此小學校に来る

前に校長をして居たのは、小出三平氏が八年、市東倉藏氏が十三年次に四宮寅松氏が四年、次に私が滿二十年奉職して居りますが、その間には本校の關係者及び卒業生中よりは、相應に人物も出て居ります。殊に關係者として、渡邊先生の如き一大成功者を出したのには、實に本校の名譽で、狂喜の至りに存じます。

先生は常に郷里の小學校を御忘れなかつたと見えて、折々物品の寄贈や、金錢の送與に預つて居りますが、誠に本校職員一同、感謝に堪へぬ次第であります。殊に最近の御肖像も頂いて居りますから、何れ校舎新築の上は額に掲げ、永久本校の紀念として、生徒は勿論、校下の父兄諸氏にも示す様に致したいと思つて居ります。

それに先年、私が先生を訪問して、談地方教育に及び、廳南校も早晚新築の止むべからざるを説きました時に、先生も兼て其校舎の不完備を御存じある故、大に同情を寄せられて、若し新築の折は及ぶ

限り力を竭して、一日も早く竣功を見たいものだ」と曰はれましたが、今や息壤の誓の主は、己に亡し。嗚呼實に先生の逝かれたのは、國家のため、惜むべきは勿論ですが、先生の郷里廳南の爲めには、一層惜しかつた次第であります。(編者筆記)

嗚呼從兄

千葉新聞記者 松本順一郎

故從兄の事を私が云々するは如何しい事であるが、私の爲には、成功の又從兄であり、教育の又從兄である。私をして社會に立つて、ハシと水を得べく教へられしこと親切に、又た吝ならざりしは、世の縁者否、私の縁者中に在つて、兄一人であつたのです。私は自分の關係する千葉新聞に托して、雑誌の拔書と逸話と寄行とを書かせましたから、茲にくどく云ふことを止めて、只々「悼む哉」と云ふに止め

ます。

香高し鳥來りても囀らず

幸に滋氏父の意志を守りて、教育界の爲めに盡すを契らば、予の最も快事とする所なり。

花なくもさくららはやはり櫻哉

雑感

在静岡縣大宮町 加藤たか子

田舎には御師匠様といつて、裁縫を教ふる處があります。多くは年取りたる婦人か未亡人とかで、一寸腕の器用の者が、生活の爲に此事に従うて居るのです。又仕立屋でも、針子といつて同じく裁縫を教へます。田舎の女子は、十六七才から二十歳前後までは、此等の所に入入して、裁縫の一般を覚えるのであります。然るに此のごとき

所では、只縫ふ事ばかり教へて、裁方や積り方は容易に教へない。積り方の如きは、一生教へずに通る事もある。普通、襦袢より着物、羽織、帯、被布位にて、袴は教へない方が多い。寸法を教ふるにしても、只獨斷的に差當り其物ばかりにて、一般に通ずる法則に迄至らないから、幾年通つても應用がきかない。それだから、昔の事を其儘受継ぐばかりで、進歩といふ事がない。加ふるに、袴や比翼は、秘傳とか何とかいつて、特別の授業料を要する等の弊さへあります。然るに、渡邊先生出でて、東京に始めて裁縫の學校を設立せられ、生徒を集めて内外の裁縫一切に就て、理論と實際との方面より教授せられたれば、一を聞て十を知る、即ち應用のきく者が續々と出る様になりました。先生は又、裁縫に關する著述や、裁縫器具の改良、裁縫教授法等に就て、大に社界に盡され、爲に先生の門下に入りて教を受けぬ者までも、大に進歩せる裁縫を學ぶ事が出來たのです。近年女子教育

の聲高く、女子の學術技藝の研究に従事する者、日に月に増加し、先生の門下に教を乞ふ者頗る多く、在學生卒業生の多き事、常に都下第一に居るは、全く先生の徳の然らしむる處であります。此等多數の卒業生中、或は家庭に於て、或は學校に於て、裁縫に關し子女の教育に従事する者全國に普く、裁縫の教授としいへば、至る所先生の主義を繼承し、鼓吹せざるはなきの有様を呈して居ります。何と盛てはありませんか。併し多くの中には、まゝ手の口に適はずして、折角の理論も工夫も、水の泡に歸する事なきにあらず。社界の批評を受くるは是れてす。裁縫は一つの技術でありすから、手の練習は頗る大切で、此の口に此の熟練の手あらば、所謂鬼に鐵棒であります。今や戰勝の後を受けて、世界一等國に進める我が國は、人生必須の衣食住中、衣類に關する教育が先生の主義の普く行はんとせるの時に於て、先生には他界の人となられた。先生が生前に於て、世界に

揚げたる名譽を不朽に傳へんは、我等卒業生の覺悟一つにあります。されば、卒業生たる者は、道德堅固なるは勿論、此學藝に關し、理論の研究と、技術の習熟とに意を専らとし、先生の主義を發揮すべきであります。先生身はたとへ他界に去らるゝも、靈は宇宙に瀰漫して、我等の事業を見そなはずらん。我等は常に此心を胆に銘して、忘れぬ様にしたき者であります。聊か思ふ事を述べて、追悼録の一ページに加へます。あなかしこ。

亡父の遺訓

東京裁縫女學校長 渡 邊 滋

五月十七日、余が授業をして居ると、順天堂病院から使が來て、直ぐ來る様にこのことであるから授業を終るや否や、大急ぎで行つて見ると、案外にも次の如きことを云はれた。

父今迄は創業時代で、何一つ整理が付いて居ないで、只今云ふから今後其通りせい、

との事である。吾々居合せた母上姉上(かをる)及妻までが、共に遺言よと早合點して、涙を催さない者は一人もなかつた。余も男ながら生れてから、此時ほど手も振ひ、舌も澁つた事はなかつた。その時自分分は斯く云ふた。

滋父上、餘り御氣が弱い、今殊更に整理なさらなくても、御全快後で良しからう。

父否然らず、自分は氣の弱きに非ず、死を期して居る。定むべきことは、今定めざるべからず、例へ再び立つことを得るとも、今父が云ふ通り實行すべきものなれば、自分が死すると否とに係はらず、家憲として疾く書き付けよ。

との嚴命であつたから、餘義なく云はるゝがまゝを書きつらねた。

故にこはその際、單に自分の覺書までに記して置いたのである。

一、瀧ノ川村、玉川村、東竹町、湯島六丁目ノ地所、家屋全部及學校收入並ニ教科書等ノ全收入ハ、渡邊家ノ財産トスルコト。

一、渡邊家及學校ニ關スル萬事ヲ坪井正五郎先生、那珂通世先生、鹽澤昌貞先生ニ相談スルコト。

一、西須賀町所在ノ地所、家屋全部ヲかをるニ與フコト。

一、渡邊家ヨリ毎月金〇〇圓ツ、ヲ母ニ贈ルコト、
但病氣ノ節ハ、全費用ヲ渡邊家ヨリ支出スルコト。

一、千代子及しん子へ、各金〇〇圓ヲ與フルコト(株券代用)

一、千葉縣下ニ於テ自分ガ所有スル地所家屋ハ、全部靜枝ニ與フルコト。

一、本郷區彌生町所在ノ家屋二戸ハ、靜枝ニ與フルコト。

一、軍事公債全部ハ、靜枝ニ與フルコト。

- 一、千葉縣下ニ所有スル家屋ヨリノ收入ハ、藍野きく(母ノ生家ノ子供)ガ高等小學校ヲ卒業スルマデ與フルコト。
- 一、兄弟五人ノ内、不幸ニ遇ヒタルトキハ、毎月〇〇圓以上、金〇〇圓以下ヲ必要期間、渡邊家ヨリ支出スルコト。
- 一、孫ノ内、不幸ニ遇ヒタルトキハ、渡邊家ノ財産中ヨリ金〇〇圓乃至〇〇圓以内ヲ必要期間支出スルコト。
- 一、七名ノ孫ニ各金〇〇圓ヲ學費基金トシテ與フルコト。
- 一、何年何月ヨリ月謝ヲ〇〇錢ヅ、増徴シ、一半ヲ以テ教員ニ増給シ、一半ヲ以テ學校ノ維持費ニ充ツルコト。
- 一、渡邊家ノ維持費ト學校ノ維持費トハ、渡邊家ノ財産及財産ヨリ生ズル利益ト學校收入トニ依ルベキコト。
- 一、尙博、靜枝、清行ノ四名ニハ、各自ガ成年ニ達スルマデ、毎月金〇〇圓ヅ、ヲ教育費トシテ、渡邊家ヨリ支出スベキコト。

- 一、藍野友右衛門ニ〇〇ノ地所ヲ與フルコト。
- 一、長圓寺(菩提寺)ヘ金〇〇圓ヲ寄贈スルコト。
- 一、渡邊家ノ管理ハ、滋ニ於テナスト雖モ、萬事相談役ト協議ノ上ニスベシ。

一、鎌倉所在の地所家屋全部ハ、特ニ滋ノ自由ニスベシ。
以上

右は午前十一時半より十二時までの半時間に於ける父の話である。余が書き終りて後、一讀するを聞き取りて、靜に首肯^{うなづ}き給ひぬ。嗚呼、これが遂に父上の遺訓となつたのである。

亡祖父と愛孫

同夫人 渡邊 敏子

こは愛兒尙に代りて、記せる日記の一節なり。されば文中に、父君と呼べるは、妾の

言にて祖父君とあるは、尅の言と見給ひてよ、とし

あはれ亡き父君、父君よ。その始め、み心地すぐれさせ給はずと聞きしより、みな人、ちからをつくして看護しまゐらせつるも、日ごと悪しき方にのみ向はせられて、折から世は、花ちりて若葉にうつりゆく、五月の空、十五日と云ふに、順天堂病院に入院し給ひぬ。かくて院長佐藤ぬし始め、其他くすしの君、看護婦の方々も、一しほ手をつくされ、殊に家の者どもは云はずもあれ、教子^{せうこ}だちに至るまで、心つくしのかひもなく、遂に同じ月の二十日あまり六日の夕、悲しみなげく子孫を残して、あはれ、はかなく身まかり給ひぬ。今さら思へば、この程の心もち、たゞ夢のやうなり。

御入院中は、ひと日に一度は、必ず愛兒尅をつれ行きて御目にかゝりぬ。尅は祖父君の枕邊ちかく寄りそひて、いたくなつかしむさまなりき。次なる博は、二たび三たび御見舞申しあげたれど、未だ生れ

て程たゞぬ身の、祖父君の御顔を覚えざるべしと思へば、いじらしさ限りなし。

これも御入院中の事なりき、おのれ博をつれて御見舞にゆきしに、父君は博を見たまひて、いとうれしげに、

あゝえらいゝ、敏はえらい、男を二人も生んでくれた、女は駄目だが男は實によい、感心々々、有り難う、お禮を云ひます。

と、くり返しゝのたまひしは、げに悲しきうちにも嬉しくて、一座の人々に面目をほどこしぬ。

あはれ、みなさけ深き父君の事どもかきつらねなば、いつ盡きんやうもなけれど、二人の幼き子の人となりて後、この筆すさびを見て、なげかん事のいとほしければ、くはしくはかゝず。さはれ、たゞ一つ記しおかばやと思ふは、祖父君が殊に尅を愛し給ひし事なり。母はあまりのいたづらになげき居れども、祖父君はいつもゝ心より

の愛をもつて赴に接したまひき。赴がいたく叱れるを見ては、

どうぞ、そんなにしからなくて下さい。赴はいたづらのやうで

あるけれども、なか／＼よく考へて居る、感心な子だ。

とて、かたじけなきばかり、誠の愛をかたむけ給へり。

赴よ、御身人となりては、いつも／＼忘るゝ事なく、祖父君を忍べか

し。

博よ、汝は、祖父君の御顔をも覺えず、また生れ出で、この尊き祖父

君を持ちながら、其愛を受くるいとまもなきうちに早う別れまゐ

らせし事を、くれ／＼もかなしめるは、此記をしたゝむる母なるぞ

や。

○裁縫女學校長にて功を遺し、
渡邊氏の追悼に

東宮侍講 本居 豊 穎

針の糸の長く絶せし一寸ぢに

世をつらぬきし君がいさをは

○裁縫女學校長渡邊辰五の追悼に
追悼詩歌
御歌所 候子爵

長谷 信 成

君があとこそ忍ばれにけれ

○同じ人の追悼に

御歌所參候 文學博士 小杉 權 編

の愛をもつて赴に接したまひき。赴がいたく叱れるを見ては、
どうぞ、そんなにしからないて下さい。赴はいたづらのやうて
あるけれども、なか／＼よく考へて居る、感心な子だ。

とて、かたじけなきばかり、誠の愛をかたむけ給へり。

赴よ、御身人となりては、いつれも忘る事なく、祖父君を忍べか
し。

博よ、汝は祖父君の御身人なり、覺えたまはれ、出でて、この尊き祖父
君を待ちながら、其愛を受くるいとまもなきに、早う別れまる

らせし事を、くれ／＼もかなしめるは、此記をしたゝむる母なるぞ
や。

赴の追悼

○裁縫女學校長にて功を遺し、
渡邊氏の追悼に

東宮侍講 本居 豊 穎

針の糸の長く絶せじ一すぢに
世をつらぬきし君がいさをは

○裁縫女學校長渡邊辰五郎ぬしの追悼に

御歌所參候 子爵 長 谷 信 成

たちぬひの道をひらきて過にける
君があとこそ忍ばれにけれ

○同じ人の追悼に

御歌所參候 文學博士 小 杉 楹 邨

こゝろのにしき
幅ひろらかに
裁ち縫ふ針の
すゑの世かけて

たてよこに
織りなして
いとながく
ぬきとほす

○渡邊君の一周祭に追悼のこゝろを

中教正 服部 勝衛

唐衣たち縫ふわざのまゐるべして

なき數に入る君ぞ悲しき

○憶渡邊辰五郎先生。慨然賦此

大沼 鶴林

混沌始開奠乾坤。

陰陽二氣生一元。

乃知剛柔成兩性。
女性慈愛兼綿密。
圓滿綢繆齊家美。
先生諱辰渡邊氏。
呱呱聲裡已非凡。
瑩瑩寄身叔父家。
奮然去游江都天。
夙夜慘澹十年久。
此間惜陰學算筆。
淬礪肄業爲根柢。
艱難玉爾先生事。
裁縫發達爲我命。
指導受恩幾千人。

人爲豈可動本源。
和德懷柔春風溫。
琴瑟好合富子孫。
崛起南總長南里。
不幸幼時失怙恃。
立志欲興光門美。
裁縫就師甘驅使。
運針工夫精于勤。
月謝苦心三百文。
胚胎他年大成勳。
古人不欺吾亦云。
斬新改良忽世賞。
門下復傳天下廣。

巍乎聳空聖廟邊。
經營如此豈偶然。
孺人淑德共苦樂。
子女振振知陽報。
先生雖死猶生者。
窈窕婦女剪裁巧。
先生奮爲斯道宗。
能使懦夫立志焉。

先生學校人所仰。
精神一到是勉彊。
周密用意內助功。
克紹箕裘家聲隆。
德光日見繡簾中。
衣飾中節文明風。
勉彊堅忍世模範。
嗚呼斯人德湛湛。

○功成り名遂げて逝去せられし
渡邊大人の靈前に額づきて

松本 蔦齋

梅の實の大往生や露の上

○渡邊先生をいたみて

同夫人やえ子

暮てさへ影の明るし花卯つ木

○東京裁縫女學校々長渡邊大人の
みまかれるをいたみて

富田 豊春

たちぬひの道のをしへ子あまたおきて
かへらぬ旅にたつころもかな

○渡邊先生を悼みて

東京貯蓄銀行青山支店長 横山 徳次郎

教子のさま見るたびに忍ぶ哉

雲に入りにし親鳥の影

○渡邊大人の御墓前にて

大日本婦人正風會長 中島義弼

おくつきに花を手向けて佇めば

青葉がくれに鳴くほととぎす

○地に咲けば

諸嬢に代りて

小寺秋雨

歸りまさん御魂なりせばおくつきのつめたき石も千夜い
だかまし

のほりては天なるみ星地に咲けばいさをの花と薫ります

君

仰ぎてはまたも御像に泣かるよ、おろそかなりしありし

昔の

師をしぬび御像仰げばありし日の、み教へむねにまたあ
らしき

わすれじよ高き御師のみをしへを、わが世のかぎり胸に
ゑりても

○通夜の折よめる

東京有樂庵主 田畑夏子

夜もすがら柩まもりて師の君の

ありし世かたる聲のかなしさ

盡きはてし涙と共に夜は明けて

庭のかなたに鳴くほととぎす

一五〇

○哀傷一首

上田女子技藝學校長 手塚半右衛門

師を送る少女の千々の涙こそ

谷中の奥のふちとなるらめ

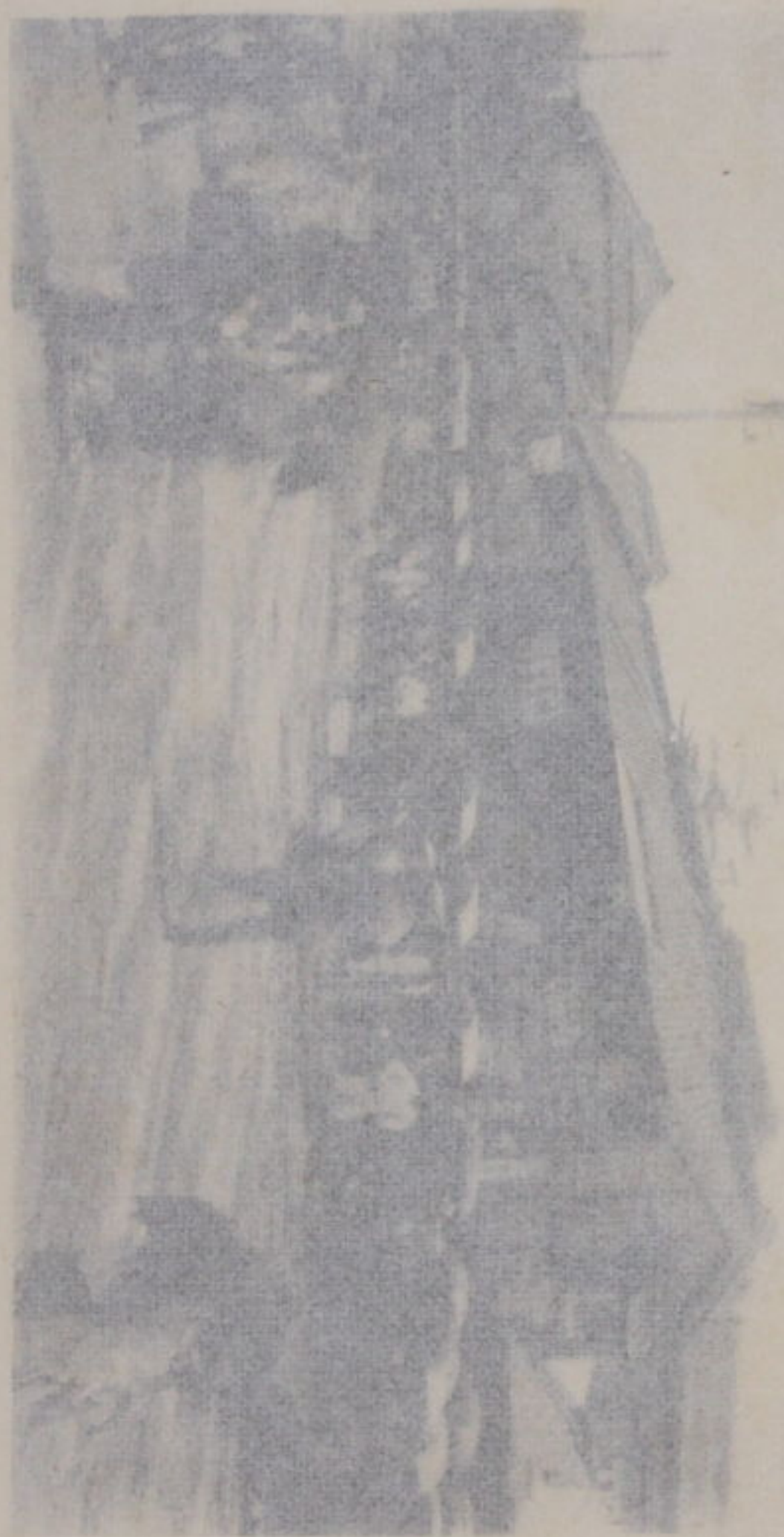
○故渡邊先生の墓前に捧ぐ

大須賀女學校長 五島敬三

訪ひくれば松ふく風の音のみに

むかしを徳ぶ袖の上の露

○恩師渡邊先生を悼みまつりて



庭のかたに嗚くほととぎす

○哀傷一首

上田女子技藝學校長 手塚半右衛門

師を送る少女の千々の涙こそ

谷中の奥のふちとなるらめ

○故渡邊先生の墓前に捧ぐ

上田女子技藝學校長 手塚半右衛門

静かに眠る先生よ 秋の空のふち

むかしを懐く墓の土の香

○恩師渡邊先生を悼みまつりて



(六北) 列 行 儀 葬

上田女子技藝學校教頭 黒川さく子

師の君の命ながかれ百とせも
千とせもがなと思ひしものを

○ 恩師を悼みまつりて

長野高等女學校 鳴海玉子

世の中に直なる針の道をもて
教へし人の昔をぞ思ふ
みめぐみを忘るゝひまもなかりけり
針もたぬ日のなき身なりせば
年ごとに照りこそまされ武藏野の
高きみ空にとめしひかりは
緒だまきのいと一筋に朝な夕な

むかしの君を忍ぶ頃かな

一五二

○故校長の君を悼みまつりて

東北女子職業學校教員

佐藤 壽子

亡き君をしのぶ涙か大かたの

秋よりしげき袖の上の露

○故渡邊先生の徳を懐ひてよめる

應南小學校教員

宮崎 道臣

いとくゝ小さき針の道

みがき修めて末遂に

ひゞき給ひしも、敷の

都大路に聳え立つ

學びのにはのたかいらか

高きいさをぞ仰がるゝ

いとくゝ細き針の道

ふみあらはして山の奥

海のほとりに住む人も

居ながらたどり進むべく

栞し給へる手すさびに

深きめぐみぞ忍ばるゝ

小さき細き針の道

都に鄙にひろめける

高きほまれは皆人の

纏ふころもを縫ふ糸の

長くいひつき語りつき

たつとも絶えじ世と共に

○故渡邊先生のうつしゑのみ前に

桑名女子手藝學校長

駒木根りう子

明け暮れに思ひぞ出づる裁ち縫ひの

をしへの親のうつしゑを見て

一五三

○ 渡邊先生の御霊前に

蛇口かね子

村しぐれ音しづかなり亡き人の

今宵いづこに夢みますらん

柴垣に蟲の音しげき夕まぐれ

なき師を忍ぶ袖のつゆけさ

縫ひゆかん師のあととめて唐ころも

雨ふるあした風ふくゆふべ

○ 渡邊先生を悼みて

多田とせ子

み弟子らを後に残して天つ國に

ひとりたゝしゝみ心やいかに

亡き君を忍びまつりて五月雨の

しとゞ降る夜を泣きあかす哉

朝夕にさとし給ひしみ言葉を

思ひ出でゝは袖ぬらすかな

○ 亡き師の君を慕ひまつりて

高知縣中村町高等小學校 松岡香枝子

師の君は世になき數に入りませど

ほまれはくちじ千代よるづ代に

過ぎはてし昔のそゝる忍ばれて

ぬるゝ袂のかわくひまなし

○ 恩師の御霊を祭りて

山崎こと子

うつしゑかゝげ

師の君の

み靈をまつる

このあした

手向くる花の

一枝に

雨か涙か

白つゆか

かゝるもわびし

はらくくと

○ 渡邊辰五郎君のみまかりしを聞きて

大日本歌道奨励會員

古橋平八郎

武藏野の露と消えにし君をこそ

思ふたびごと袖はぬれけれ

○ 渡邊大人のみまかり給ふを悼みて

林 慈 圓

をしめどもかへらぬ君か旅衣

裁ち縫ふわざを世には残して

○ 渡邊先生を悼みて

前 田 縫

針の目のこまやかなりしみ教へを

衣ぬふたびにしのはび出でつゝ

針の道よし細くともみをしへを

葉となして國につくさん

○ 恩師を悼みて

埼玉縣川越町裁縫女學校

岸野りか子

浮雲のはるゝひまなくぬばたまの
やみ路にまどふ糸針の道

○渡邊先生を悼みまつりて

鈴木みつ子

たちぬひの道を開きし師の君よ
今はいづこに夢みますらむ

○渡邊大人の功績を思ひて

牛田 惠 鏡

たち縫ひのわざいと高きほまれをば
千代に残して逝ける君かな
神の子にみ手をとられて安らけく

世を去りませる君ぞたふとし

○恩師を悼みて一句

千葉縣佐原町裁縫女學校長

井上はな子

紫陽の色も淋しき回向かな

○渡邊辰五郎君を悼みて

南 茂 秀

この世をば見すてゝいにしなき君が
おもがげ忍ぶ水莖のあと

○渡邊大人を悼みて

林 宗 圓

たちぬひの道のしをりも失せにきと

いくその人や袖しほるらん

衣ぬふ道のおくかを尋ねてや

かへらぬ旅に君はたちけむ

○

たちぬふ道のしるべして

世につくされし いさをしは

うせ給ひにし 後までも

幾千代かけて 忘れぬや

○弔歌三首

山崎 琴子

○星の夜に恩師を偲びて

師のみたま安けく天にねむりゐて

ほゝ笑みますか星のまたゝき

○御送葬の御模様を承りて

なきからを見送る野べの草木にも

なげきのつゆの宿りをぞ見る

○御偉徳を思ふ

みほまれは千代に八千代に盡きざらん

裁ち縫ふ道の神と呼ばれて

○恩師を憶ふ

東京裁縫女学校普通科 稲田ふて子

たちぬふ道に分け入りて まだ日も浅き昨日今日

厚きみ教へ受けし身の 杖よ柱とたのみたる

我が師の君は果敢くも
 功績を千代に残しつゝ
 夢かとはかり思ほえて
 くもる涙をかき拂ひ
 呼へど答へはし給はず
 仰ぎ慕ひし師の君は
 定めなき世の露の身は
 みめぐみ深き師の君を
 偲ぶにあまる我が胸を
 御魂にさゝげたてまつり
 深きみなさけ忘れまじ

人のなげきを後にして
 亡き人数にいりましぬ
 しばしは惑ふわが心
 恩師の御像仰ぎ見て
 あゝなつかしき御姿は
 昔のまゝにかはらねど
 もはや此世におはさぬか
 思へばいとゞ果敢なしや
 おくつき近く詣てゝは
 心のかぎり一ト筋に
 厚き御恩は忘れまじ

○故渡邊先生を思ひ出で

野村なか子

裁ち縫ひの道の明星この君の

ひかりは千代に照りまさるらん

針とればいとゞ悲しさまさるなれ

なき師の君を見る心地して

やみの夜の光とも見したちぬひの

道しるべなしあゝいかにせむ

うつしゑを見るも涙のたねなれや

今は世になき君と思へば

○故校長の訃音に接して

小田つね子

縫ひとむる事のかたさに唐衣

たち別れたる君の命か

一六四

○故渡邊君の成功を思ひて

大木忠治

み心にかなふ望みの光こそ

都にひなに照りわたりけり

○渡邊大人を悼む

牛田宗節

衣ぬふ道を教へし師の君を

思ひ出でゝは袖ぬらすかな

○師の御功績を思ひて

堤 けさか

裁ち縫ひの教を今にあらためし

いさをは消えじ後の世までも

○渡邊先生のみまかり給ひしを

福田素子

いたみ奉りて

あや錦たち縫ふ道の神となりて

ほゝえみますか星のまたゝき

○師の君のみまかり給ひしと聞きて

深井はつ子

武藏野の露と消えにし師の君の

一六五

おもかけ忍ぶ五月雨の頃

一六六

○御墓前に花を手向けて

小森政子

おくつきに手向けし花を訪ふ蝶は

御靈かあはれ袖に止まれる

○恩師のうつしゑに對して

菅野しな子

うつしゑに今日もまばしは語りけり

訪へど答へぬ君にはあれども

○渡邊先生の御逝去を悲みて

私立澤田裁縫女學校長 澤田かめ子

なつ引の手ひきの糸のながれと

いのりしかひもあらぬ君かな

○あはれ師の君に

よし子

師の君に別れまつりて五月闇

針の道をばいかにたどらむ

○渡邊辰五郎君を悼みて

大東庵東泉

白蓮のかをり残して散りにけり

一六七

○弔 詞 二首

小森 松風

○故渡邊先生を忍びて

心のにしき

縫ふ針や

直ぐなる道を

行く糸に

君の御靈や

通ふらむ

大和をみな

志るべして

○御墓前にて

花輪の露を

小硯に

受けて手向の

歌よめば

薄雲かゝる

朝月夜

かすめて啼くか

ほとゝぎす

病床日記

この日記は故校長の令息渡邊滋氏の手記中より抄録せるものなり、編者

五月二日 便通なき爲め服薬す、後下痢引續き止まず、遂に發熱す、
荒井醫師の診察を受く。

五月三日 前日の如く時々發熱す、荒井氏來診

五月四日 荒井氏來診、異状なし。

五月五日 前日の如し、荒井氏來診

五月六日 異状なし、荒井氏二回來診。

五月七日 少しく惡寒を覺ゆ、後發熱す、食慾なし、荒井氏二回來診。

五月八日 惡寒を感じ、發熱四十度以上、食慾なし、荒井氏二回來診。

五月九日 惡寒、發熱共に前日の如し、熊谷千代來る、此日、入澤博士

の診察を受く、荒井氏二回來診、食慾なし。

荒井氏來診 報